

June 21, 2026

善意・御霊の実

ローマ 15:13-14

15:13 どうか、希望の神が、信仰によるすべての喜びと平安であなたがたを満たし、聖霊の力によって希望にあふれさせてくださいますように。

15:14 私の兄弟たちよ。あなたがた自身、善意にあふれ、あらゆる知識に満たされ、互いに訓戒し合うことができると、この私も確信しています。

聖書にある9つの「御霊の実」、「愛」、「喜び」、「平安」、「寛容」、「親切」、「善意」、「誠実」、「柔和」、「自制」のどれも、一般的な徳目として知られているものばかりです。何も聖書から学ばなくても誰もがその大切さを知っていて、そうしたものを求め、身に着けようと努力しています。親は、子どもが小さいうちから嘘をついてはいけない、友だちに親切にきなさい、約束を守りなさい、何事も我慢しなさいと教え、しつけます。学校では「寛容」の精神が教えられ、社会ではそれが要求されます。アメリカのように歴史も文化も言葉も違う人々が寄せ集まって成り立っている国では「寛容」は「国是」のようなものとして扱われています。

しかし、「御霊の実」が信仰から離れて独り歩きしてしまうと、それはたんなる「徳目」で終わってしまいます。「御霊の実」は律法の行いを超えたもの、律法を成就するものであるのに、自分の努力で身に着けなければならないもの、「律法」の要求になってしまうのです。また、「御霊の実」の一つひとつを聖書によって正しく理解していないと、自分勝手に解釈して、「愛」を「欲望」に、「喜び」を「エンターテインメント」

に、「平安」を「気休め」にしてしまいかねません。「御霊の実」シリーズのメッセージではすこしばかり聖書研究的なお話しもしていますが、それは「御霊の実」を正しく理解するために必要なことですので、しっかりと学んでおきましょう。

一、善意とは

きょうは「善意」について学びますが、「善意」とは何でしょう。もとの言葉では ἀγαθωσύνη（アガソースネー）といって、新約に4回出てきます。εὐδοκία（ユードキア）も「善意」を意味する言葉で、こちらは9回出てきますが、日本語の聖書ではほとんどが「みこころ」と訳されています。たとえば、ルカ2:14は「いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように」となっています。ラテン語では “*Gloria in excelsis Deo. Et in terra pax hominibus bonae voluntatis*”（天のいと高き所には神に栄光。そして地には、善意の人に平和）と、「善意」と訳されています。神のみこころはいつでも「善」なのですから、「みこころにかなう人」を「善意の人」と訳すのはふさわしいと思います。テサロニケ第二1:11では、ἀγαθωσύνη（アガソースネー）と εὐδοκία（ユードキア）が両方使われています。「どうか私たちの神が、あなたがたを召しにふさわしい者にし、また御力によって、善を求めるあらゆる願いと、信仰から出た働きを実現してくださいように」との祈りの中で使われています。「善を求めるあらゆる願い」と訳されているところは、善意をもって善を願い、善意から生まれる善を求めるという意味になります。信仰者はいつも心に「善意」を持っていて、「善」を求める者であるようにとの祈りが書かれているのです。

ですから、「善意」とは、他の人の「善」を願う意志の働きを指しているといえます。「寛容」、「親切」、「善意」の三つを比べるなら、「寛容」は態度、「親切」は行動、そして「善意」は意志、あるいは動機に関わるものです。同じことをするのでも、善意で行われたものと、そうでないものとは明らかに結果が違います。神は、私たちに寛容な態度、親切な行いととも、私たちの心や意志がきよめられて、他の人の「善」を願う思いを持つよう求めておられます。そのような心のきよめは聖霊によってしかできません。ですから「善意」は「御霊の実」と呼ばれるのです。本物の善意は聖霊によって生み出されるからです。

二、神の善意

神は私たちに「善意」を求められますが、それは、神が、まず、私たちに対して、あふれるばかりの「善意」を注いでくださったからです。「はじめに神が天と地を創造された。」「はじめに神が……」という言葉が聖書の最初に書かれているのは決して偶然ではありません。聖書は、すべてのことが神から始まっていることを教えています。世界は神によって始まりました。人間も神によって造られました。神はご自分が造られた人間を、何にもまさって愛されました。聖書は、こう言っています。「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」（ヨハネ第一 4:10）私たちはこの神の愛によって救われ、神を愛する者とされ、他の人々を愛することができるようになりました。

世界には多くの宗教があり、神と人との関係を教えています

が、それらは、順番を取り違えています。「はじめに神が……」ではなく、「はじめに人間が……」なのです。人間が互いに愛し合うようになれば、神は人間を愛して救ってくださる。人間は心をきよめ、生活を正し、善い行いを積み重ねて、天の神へと上っていかねばならないと教えます。しかし、そのようにして天に登りつめた人は誰ひとりありません。聖書は、それとは逆のこと、神が天から地にくんだり、人の救いのために命を献げられたことを告げています。人は、この神の愛によってはじめて、救われ、神を愛し、互いに愛し合う者になれるのです。私たちは、天からの恵みで救われ、造り変えられます。ギリシャ語で人間は ἄνθρωπος（アンスローポス）といいます。それには「上を見る者」という意味があります。多くの動物は四足で地面を見ながら歩きますが、人間は真っ直ぐに立ち、天を見上げます。これは、人間の姿、形、姿勢のことだけではなく、内面のことを言っています。人は神を見上げ、仰ぎ見て、神からの恵みと祝福を受ける者として造られているのです。

ですから、「善意」もまた、神に始まり、人へと与えられます。私たちは神を仰いで、それを受け取ります。ヤコブ 1:17に「すべての良い贈り物、またすべての完全な賜物は、上からのものであり、光を造られた父から下って来るのです」とあるとおりです。ヤコブ 1:5には神の善意が描かれています。「あなたがたのうちに、知恵に欠けている人がいるなら、その人は、だれにでも惜しみなく、とがめることなく与えてくださる神に求めなさい。そうすれば与えられます。」「知恵に欠けている人」は、いつの時代、どこでも軽蔑されたものです。しかし、神は、「自分は何でも分かっている」と思い込んで高慢になっ

ている人よりも、謙虚になって知恵を求める人を喜んでくださいます。神は、「だれにでも」、「惜しみなく」、「とがめることなく」、知恵を与えてくださいます。人間の場合は「だれにでも」というわけにはいきません。大学や専門学校で知識や技能を得ようとしたら、試験を受けて合格し、たくさんの授業料を払わなくてはなりません。また、伝統芸能の世界では、親から子へとそれが引き継がれますから、部外者は入り込めないのです。また、教授、教師、師匠と呼ばれる人たちの中には知恵、知識を与えるのを「惜しむ」人もあります。また、忙しすぎてきちんと教えてもらえないこともあります。それに、同じことを何度も尋ねると、「前に教えたじゃないか」、「そんなこともわからないのか」と「とがめ」られることさえあるのです。しかし、神は「だれにでも」、「惜しみなく」、「とがめることなく」与えてくださるのです。しかも、神が与えてくださる知恵は、私たちの人生を豊かにするものです。ヤコブ 3:17にこうあります。「しかし、上からの知恵は、まず第一に清いものです。それから、平和で、優しく、協調性があり、あわれみと良い実に満ち、偏見がなく、偽善也没有ありません。」

神からの知恵が、「清く、……平和で、優しく、協調性があり、あわれみと良い実に満ち、偏見がなく、偽善也没有ありません」といわれているのは、まさに神が、そのようなお方、「善」なるお方だからです。詩篇 119:68 に「あなたは いつもしみ深く／良くしてくださるお方です」とありますが、これは英語では “You are good and do good.” と訳されています。「神は善にして善を行われる。」聖書を読むとき、神がどんなに人を愛し、あわれみ、善意をもって導いてくださったかを知ることができます。また、自分の人生をふりかえって見るとき、神

が私たちにどんなに善いことをしてくださったかが分かります。その度に、私たちも神の善に感謝し、また、神の善意に対する信頼を新しくしたいと思います。

三、私たちの善意

私たちには神の善意が注がれています。そして、聖霊は、神の善意の種を信じる者のたましいの中に植え付けてくださいました。御言葉の水を注がれ、神の御顔の光浴びて、それは成長し、実を結びます。御霊の実は、自分のためだけに結ぶものではありません。他の人に分け与えるためでもあるのです。自然界では、鳥や動物たちが木の実をとり、それをあちらこちらに運び、その場所で種が地面に落ち、根付き、芽を出し、成長して、増え広がっていきます。そのように御霊の実も、私たちが他の人に分け与えるとき、人から人へと手渡され、広がっていくのです。私たちも「善意」という御霊の実を結び、「善」という種を蒔く者になりたいと思います。

きょうの箇所、ローマ 15:14 には、クリスチャンの交わりの中で「善意」を働かせるよう教えられています。「私の兄弟たちよ。あなたがた自身、善意にあふれ、あらゆる知識に満たされ、互いに訓戒し合うことができると、この私も確信しています。」ここには、「善意」と「訓戒」が組み合わさっています。クリスチャンの交わりは、互いに慰め合う、温かいものですが、同時に、切磋琢磨しあう、真剣なものでもあるからです。教会は「弟子訓練」の場です。しかし、そこに愛から生まれた「善意」がなかったら、「弟子訓練」も、互いに責め合ったり、競争しあったりするだけで終わってしまいます。ですから、聖書は、御霊の実である「善意」によって、互いに高め合

い、建て合う交わりを育てなさいと教えているのです。

「善意」は英語では “good will” です。“good will” といえばアメリカの町にはどこにでもある Goodwill のドネーションセンターやスリフトショップを思い浮かべる人が多いと思います。Goodwill は 1902 年、マサチューセッツ州ボストン市の貧しい移民たちを助けるため、メソジスト教会のエドガー・ヘルムズ牧師によって始められたもので、今は世界的な組織になっています。韓国にも Goodwill はありますが、残念ながら日本にはまだありません。今では教会とのつながりは薄れましたが、それは教会から始まったものです。多くの良い働きがクリスチャンによって始められ、社会を支えているのは感謝なことです。この団体は始まったときから、人々の「善意」を「チャリティ」と考えてそれに甘えるのではなく、「善意」を経済的に自立するための「チャンス」として生かすことを目指してきました。それで、職業訓練に力を入れています。Goodwill は聖書が教える「善意」を正しく理解しているように思います。

私たちも、聖書の教えにしたがって「善意」を正しく理解し、どんなことも御霊の実としての「善意」から行う者となりたく思います。

（祈り）

父なる神さま、私たちは日々、あなたの善意によって生かされ、養われ、導かれています。どんなときも、あなたの善意に信頼し、私たち自身に、また、私たちの交わりの中に、御霊の実である善意が満ちるよう、助けてください。主イエス・キリストのお名前です。